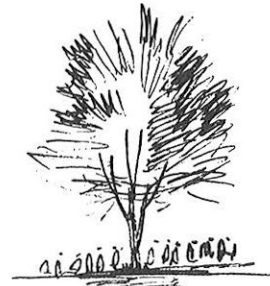


ひかりのこ

光の子



No.105

2003.11.1

●今年の聖句 わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合
いなさい。(ヨハネによる福音書15:12)



「悼!」

挿絵・中島英子

「野を跳んで」

少年の孤独はまぶし秋ざくら

とび出して光りて秋を急ぎけり

野を跳んで少年去りぬ草ひばり

太眉の少年剣士花野行く

赤とんぼその後の空にふえてくる

しろがねの水をたたへて月わたる

爽やかに光りて天にましませり

落合 水尾 (『浮野』主宰)

発行／社会福祉法人 光の子どもの家 TEL/0480-72-3883 FAX/72-6649 振替／00130-1-128022
編集／光の子 編集委員会 e-mail:khikari@ceres.con.ne.jp 〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277 印刷／プリンテング瑛和

追悼 渡部かずき君

施設長 菅原 哲男

一九九五年六月、事前に担当者などが面会していたのだが、渡部かずきは両親と乳児院の大谷保育士などと一緒に小さな体に不安だけを詰めて入所して来た。

六月の入所で、すぐに夏休み行事が続く、東武動物公園で楽しみ、教会学校の夏期学校にもはじめて参加でき、湯河原の海にも遊んだ。

お祭り好きの職員が必ず出かける加須市の花火大会では、枝豆やスイカに夢中になり花火は見ることもなく、帰りに躓いて転び最後にもらったジュースを殆どこぼして大泣きし、彼のケースファイルは約一年で最難題のトイレットトレーニングが終了したなどの記録で埋められている。

父母も川口から自転車を駆って面会に来てはよく泊まっていた。そんなママやパパが大好きなおさな子であった。

翌年三月末に弟が入所してきて兄弟関係が本格的になり、喧嘩をし、庇い合いその関係が二人を安定させる絆となってきた。

二人とも、食事のあとの挨拶をしたり、「ゴットチャマデタ、ボンボンボン」と調子よくみんなを笑わせてくれた。

一九九七年四月に大利根藤幼稚園に入園。その年の表現発表会では「リトルインベーター」を上手に踊り、翌年の運動会では開会の挨拶を立派にすることが出来た。

九九年四月原道小学校入学。海老沼教諭担当。

家庭訪問時には、絵が上手で体力は学年を超えている。課題だった忘れ物も少なくなってきたいると、大きな評価に喜んだ。

十月末、都幾川村在住の荒川靖三氏より七月十五日に父が死亡し葬儀も親類など集めて済ませたと連絡。

二〇〇〇年四月弟が原道小学校入学。

八ヶ岳連峰天狗岳を小学生グループで征服し、プールで十に泳げた夏休み。

クリスマスパーティーで羊飼いの長役を。

家庭訪問で田口教諭が、友達も増えてきている。やさしい顔張りやさんだ。少しペースをゆっくりにした方がいい。などと助言。

小学校の硬筆展で金賞受賞、運動会、記録会、駅伝などに大活躍。一〇〇M走学年新記録樹立。クリスマスキャンドルサービスで、「クリスマスが大好き。同学年の楚緒君が大好き。世界で一番好きなのはイエスキリスです。楚緒君やここにいるみんなと会わせて下さったから。いつも寝る前にそのことをありがとイエスキリスさまにお祈ります。」とメッセージ。

二〇〇二年一月弟の宿題を見て「セーターは人の心をあたためる」と俳句を作る。

バレンタインデーに同学年の美季からもらったチョコがとても嬉しかった、と。

年度末神田幸枝保育士退職。

二〇〇二年四月相良有美保育士担当。

大利根町剣友会入会。剣道を始める。

八月誕生日にたくさん友達に来てくれた。

竹花副施設長と博物館に行きコスモで食事。ロウソクのついたケーキが贈られてこ機嫌。

担当になった相良保育士の誕生日に朝一番に「おめでとう」とお祝いの挨拶をする。

原小つ子合唱団入団。

クリスマスキャンドルサービスで、相良保育士に、「今年から光の子どもの家の保母さんになり、なれましたか。また入所があり、担当が四人になつて大変でしょう。大変な時は助けるから言ってください。」とメッセージ。クリスマスパーティーで準主役の宿屋の主人を真里と好演。

お正月元旦。相良保育士の実家に挨拶に行く。お買い物やお年玉にご機嫌の年始め。担当保育士の相良の結婚式に参列。卒業していく高校生への「出発の会」で「千と千尋の神隠しのテーマ」を熱唱。

二〇〇三年四月。伊藤麻美子保育士担当。第十八回子どもまつりに多くの友人を招き、制作したゲルニカを誇らし気に。放課後など一緒に遊ぶ友人が多くなり、その中から特定する友人も固まりつつあった。

六月の陸上大会のリレーに選ばれて出場。七月小学生グループの八ヶ岳連峰の主峰赤岳に登頂。山頂で泊まり素晴らしい眺めを堪能。八月秋田へ原田家の子どもたち五名で。十一歳の誕生日をクラスメイトも招いて楽しんだ。

竹花副施設長が誕生日のお祝いに弟と一緒に「ポケモン」の映画と夕食を楽しみ、ポケモンの目覚まし時計をプレゼントされてこ機嫌。

いたではないか」と声を荒げて言う、院長は黙ってしまふ。

21・48 心臓が完全に停止、臨終。

「これから検死がある。多分、死因は脳ではないか。私は内臓の専門なのでお腹を触れば大丈夫かどうか大體解る。」と当直医師の説明。

21・55 田中副施設長が菅原施設長に、かずきの死去を報告。

6日1・00 警察の検死によると、死因は事故直後の腎臓の破裂によるものと診断。

この日は秋田県羽後町での講演会に招かれて留守にしていた。事故以後死に至るまでの報告は正確な判断のため必要だった。

余りにも無念なかずきの死である。

三十六年に及ぶ児童養護施設の生活の中で、在籍していた子どもの死を私は知らなかった。生まれてからのすべてが施設での生活だったかずきは、ここで受けられる教育や訓練を出来るだけ受け終えて、出て行く社会で生活することではじめて

自前の暮らしが可能になる。

子どもらしい無邪気で優しい心の持ち主であったが、何故かいつも息せきつて苛立ち生きてきたような感じのする子どもでもあった。

小学四年生の秋、一〇〇M走で級友とデットヒートを演じた末に、昏倒し救急車で病院に運び込まれたこともあった。

絵画や運動に優れ、知的には相当高い能力を持っていたが、急ぐことと、あきらめの早さがその能力をよく表すことを妨げていた。

昨年夏、八ヶ岳登山に成功した帰り、かずきと弟と担当者は私の車で帰途についた。

九月二学期。

五日午後、弟がかずきの大好きなスルメを食べようと誘うが「友達の家に行く。」と。なおも弟がスルメの足一本でもいいから食べていきなよ、と誘うが、「帰ったらゆっくり食べるよ。」と友人宅に自転車で出かける。小西指導員が「通学路で行くように」と数回注意する。「はい、バイバイ」と出かける。

16・05 大久保病院よりかずきが交通事故に遭ったと連絡。小西指導員、伊藤保育士が病院へ。岩崎保育士が菅原施設長に第一報。穴水指導員、岩崎保育士は事故現場に向かい警察による現場検証、加害者の状況見分に立ち合う。

かずきは道路脇のガードレールに絡まってそばの川にとばされ、大久保病院の看護婦らに助け出されて泥だらけになった体を洗うため看護婦や医師など五人ほどに体を洗われている。

その後大久保病院長が、頭部のCT画像と鎖骨の骨折部分、右足太もものレントゲン写真を示し、小西指導員、伊藤保育士、原道小学校担任の横塚先生に説明する。「頭蓋骨に損傷はない。頭部左側の傷を三針縫った。傷の具合から考えて脳に何かのダメージを受けた可能性はあるが、それは経過をみなければわからない。CTからは脳内の出血は確認されない。事故の際には泥水を飲んでいたので、胃の洗浄をした。レントゲン写真で見ると内臓に異常は確認できないが、おそらく膀胱に何らかの損傷があるだろう。右足の骨折については粉砕状態で、当院では処置できないがこの骨折に関しては命に関わるような事ではないので、ひとまずの救急措置が済んでから転院

途中昼食に立ち寄ったそば屋はさびれてしまった温泉宿を改造したようなものだった。

そこには落ち葉が浮いているような露天風呂などもあり、その店主は良かったらどうぞ、と言ってくれた。

そばを食べ終わってかずきと弟はかなり大きな露天風呂に飛び込み実にはゆらゆらと泳ぎ、お湯を掛け合っては暴れ、たつぷりと戯れたのだった。そばで見ていても、楽しさが伝わってくるような光景で、子どもの持つ「自由さ」を心ゆくまで私に堪能させてくれたのだった。

今、どこでも目を閉じれば明るく笑うかずきが居る。目を開けると彼はどこにも居ない。

大急ぎで駆け抜けた十一年余のその人生はかずきにとつて何だったのかは知るよしもない。

しかし、かずきは私たちに大きな衝撃と考え悩むことを残して去っていった。かずきの生や死は私たちにとつて何だったのか。

これまで気づかなかった何か大きな変化がここでの生活に迫っている予感がある。そのことは、これまでの暮らしにある馴れや流れを変えて、子どもたちやここにいる人々の利益になるための、困難な大きなエネルギーを要求し続けるだろう。それから逃れずに、そのことが私たちに与えるメッセージを確実に受け取り、かずきの記念としなければならぬと決意を新たにしている。こんな風な良い変化はかずきの事故からだった、といつまでも確認出来るように。

し専門の病院で手術を受けることが望ましい。右肩の鎖骨も骨折。これは普通の骨折である。左足膝に傷あり。交通事故というのはどこにどのような症状が出るか時間かたないとは解らないのでひとまず様子見という事にする。なお、右足の骨折部分の出血により1,000CC程の輸血が必要となることもあるだろう。交通事故はどこにどのようなダメージを受けたか解りにくいので万が一のこともないわけではない」との事。

17・01 菅原施設長より中川指導員に、かずきの事故の容態を確認し、報告するよう指示。

17・12 穴水指導員から菅原施設長へかずきは意識あり。右大腿骨粉砕骨折。現在CTを撮って、泥を飲んだので洗浄処置をした。今動かせない。粉砕骨折に関しては大久保病院で対応できない。命に別状はない。

17・30 中川指導員が、右足大腿部粉砕骨折。用水路に落ちた際に泥水を飲んだので胃の洗浄を行った。現段階では命に別状はないようだが、頭部を打っている。様子を観察すると菅原施設長に医師の診断結果を報告。

17・44 穴水指導員から菅原施設長へ、かずきの容態と医師のCTその他の検査は大丈夫だった。命に別状はない。足の処置は後回しで胃洗浄を行ってもらった。足のその後の処置については後日、他の病院に行くことになっている。との所見を報告。

18・30 田中副施設長より菅原施設長に、かずきの容態と医師のCTその他の検査は大丈夫だった。足の処置は後回しで胃洗浄を行ってもらった。命に別状はない。足のその後の処置については数日

後になると思われるが他の病院に行くことになっている、との所見を報告。

19・00頃 かずきは病室に移される。その際、内科の専門医と数名の看護婦との間で、無線心電計の方は電波が届きにくい、モニター付きの方は院長の許可が必要だからどうしようなどと話していた。結局、無線心電計が取り付けられる。小西、伊藤、竹花副施設長、小学校の先生方数名が見守る。暴れている時以外は目を少し開けた状態で昏睡状態のような感じ。

20・15 菅原施設長から岩崎保育士に状況の問い合わせ。変化はないと報告。

20・30 かずきの唇の青さ、手のひらや足の裏の黄斑が目立つ。濃い、真赤な尿が出たためナースコールで看護婦を呼び、診てもらう。「内臓に損傷があるからでしょう。」と言われる。医師の診断はない。

21・00 徐々に顔色が悪くなり手などの体温が下がる。呼吸減少。嗚咽が続く。看護婦に小西が「これは絶対おかしい。早く先生を呼んでくれ」と言う。看護婦が医師を呼ぶ。医師はかずきを見て「これは大変だ」と言い、すぐに人工呼吸の準備と輸血の準備をする。血圧は測定不能(60以下)だったようだ。小西と伊藤は医師に部屋から出るよう言われ、廊下で待機。

21・10 穴水指導員が菅原施設長に、かずきが危篤状態なので戻ろうと連絡。

21・20 田中副施設長が病院へ駆けつけ、病室内に入り「これはどうしたのだ」と言う院長が「事故に遭って」と言い出したので「そんな事はわかってる。さっさと命は大丈夫だと言って

暑かったり寒かったり何だかわ
けがわからない夏も終わり、そし
て又、九月に入っても真夏なか
秋なかわからないような日々が
続いている中、大切な大切な仲間
を二人神様のところに送ること
になった。長年教会学校に通って
いた十一歳という尊い幼い命と七
歳という教会で大切な長老のお
人である。

交通事故で亡くなった渡部か
きくんとは残念ながら私は個人的
に話をした覚えがないのだが、し
っかりした子、小さい子の面倒見
がいい子、思いやりのある子、と
教会学校でも評判でいつか私が担
当する中高科の教会学校で交われ
ることを楽しみにしていた。大人

2つの文化に生きる 39

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

かきくんの葬儀ではかきく
んがいつも愛してやまなかった讃
美歌が歌われた。
やさしい目が、きよらかな目が、
きょうもわたしをみていてくださ
る。「まっすぐにあるきなさい」と
みていてくださる。
おおきな手が、あたたかい手が、
きょうもわたしをささえてくださ
る。「はなれずにあるきなさい」と
ささえてくださる。
かきりのないひろいところが、
きょうもわたしをまもってくださ
る。
「やすらかにあるきなさい」とま
もってください。
藍芳子さんの御葬儀では山ノ下
牧師が選ばれたいくつかの聖句の

の礼拝に出たいと最近、小学科の
先生に真面目に言っていたように
ある。どの先生に聞いても「神様
のことを素直に受け入れられる子
どもだった」と口を揃えて言っ
ている。
七歳になったばかりの藍芳子
さんは六月に検査入院、その後退
院し、自宅療養されていた。教会
員の誰もが回復にむかっているも
のと思っていた中での突然の訃報
であった。胆嚢癌という大変な御
病気だった。
かきくんの葬儀ではかきく
んがいつも愛してやまなかった讃
美歌が歌われた。
やさしい目が、きよらかな目が、
きょうもわたしをみていてくださ
る。「まっすぐにあるきなさい」と
みていてくださる。
おおきな手が、あたたかい手が、
きょうもわたしをささえてくださ
る。「はなれずにあるきなさい」と
ささえてくださる。
かきりのないひろいところが、
きょうもわたしをまもってくださ
る。
「やすらかにあるきなさい」とま
もってください。
藍芳子さんの御葬儀では山ノ下
牧師が選ばれたいくつかの聖句の

中の一つがとても印象的だった。
それはマタイによる福音書26章
のベタニアで主イエスに高価な香
油を注いだ一人の女性の話である。
実に藍さんはこの気前の良い女性
を思わせる人だったと言われた。
どちらか教会にしっかりと繋が
り、神様に目を向けて歩んでいた。
人間の思いからすると無惨にも中
断されてしまった人生のように思
われるが、このすべてが神様の御
心の中にあり、二人とも神様のも
とに召されたのだと信じてること
で心に平安が与えられる。
ふと、この夏アジア学院での中
高期夏期学校の学びの時のことを
思い出した。
「主イエスとの出会い」をデー
マに昼間は農作業をし、夜は礼拝
でヨハネの福音書3章から4章を
学んだ。なかなかイエス様のこと
を信じられなかったニコデモと主
イエスに出会って信じたサマリヤ
の女の子である。
一日目の礼拝の後、私の小グル
ープの分級でニコデモとサマリヤ
の女の子との出会いを話し合
った後、聖学院大学宗教センター
で毎年出版されている緑信叢書2
7「主イエスとの出会い」の中か
ら佐野正子先生の全学礼拝奨励

「心をこめて生きる」をみんな
で読んだ。私たちは誰でも限られた
人生を送っていること。私たちは
どんな小さな存在でも、神様から
受け入れられ、覚えられ、愛され
ていること。そして主イエスがル
カによる福音書で言われた「最も
小さい者のひとりにしたのは、す
なわち、わたしにしたのである」
という御言葉。また、ジェラル
ド・シャンドリーという人の味わ
い深い言葉、「一生の終わりに残るも
のは、我々が集めたものではなく、
我々が与えたものである。」
そして締めくくりに言葉が印象
的だった。「いつか私たちにも人生
の終わりが来ます。神様から与え
られたこの人生をどのように生き
るのか、私たちは日々問われてい
るのではないのでしょうか。・・・
私たちの人生は、一日一日の、そ
して一時一時の積み重ねです。こ
の限られた人生にいつ終わりが来
ても悔いのないように「今日」と
いうこの一日を、心をこめて生き
ていこうではありませんか。その
積み重ねが私たちの人生なのです
から。」



追悼 福島 勲 先生

召天一周年記念

副施設長 竹花 信恵

澄み渡る大空、輝く星、月。こ
の頃、空を見上げることが多くな
りました。前理事長の福島勲先生
が天に召されてから早いもので一
周年を迎えます。
光の子どもの家の園庭には、剪
定が必要となる程にさまざまな形
に、色とりどり生い茂る樹木。生
命力溢れる雑草は、地域の方々の
除草奉仕のおかげで深く根を下ろ
さずに済んでいます。
緑の色、草木の一本もない一面
茶色の地の上から、この家は始ま
りました。田んぼを埋め立てた雨
がふればそのまま田植えができそ
うな場所で、福島先生による聖書
朗読、祈りによって起工式を執り
行った日から二十年の歳月が流れ
ようとしています。玄関前での植
樹、各地から集まった職員への辞
令交付等、開設時より大事な場面
に背筋のピンと張った先生がいて
下さいました。それどころか光の
子どもの家の創設以前に、その構
想の一步前にまず、理事長が福島
先生である子どもたちのための子
どもの施設ということがあり、この家
の雰囲気そのもの、最も大きな環
境をつくって下さったその存在の
大きさに改めて今も触れ直す思い
が致します。

福島先生が、そのバトンを渡し
た現理事長、飯田進先生もまた私
たちの仕事の大先輩として実践に
大きな影響を与えて下さっていま
す。初代の意志、想いが引き継が
れ、伝わって残って、そして育っ
ていく、それが伝統を持たない若
い施設の私たちの伝統となってい
くことを心から願っております。
福島先生の昇天一周年と、まさ
か子どもの追悼が重なるとは思っ
ておりませんでした。心の整理に
はまだまだ時間がかかりそうです
が、死を無駄にしないことを職員、
子どもたちと話し合いながら暮ら
しているところです。
先日、幼い子どもたちとつま
いも掘りに出かけたとき、青空に
ぽっかりと浮かぶ雲を見て「か
き君が見てるね」と言う子どもた
ちの声が重なりました。また、夜
になると「どうしてあの時、漫画
を貸してあげられなかったんだろ
う」と彼女なりの悔いで涙を流す
小学生、自分の大切なおやつを遺
影の前に供える子どもたちです。
学校の先生もたくさん大好きだ
った友達もかけつけてくださいま
した。うれしい時も、悲しいとき
も、心はいつもいっしょにいます。
「ぼくが大人になってもかき君は

十一歳だね」と言う子どもの言葉
のその現実に胸のふさがる思いが
しましたが、ひとりひとりの心に
生き続けることでしよう。
思いがけず最後の夏になってし
まいました。不思議なことに、こ
の夏はなぜか、いつにもまして多
くの人たちと、それぞれ特別な時
間を共有し、たくさんの方々の思
い出を語り、笑顔と歌声を残して
いたことに気づかれます。見る
たびに大きくなっていくような思
いがした成長の日々でした。
福島先生と出会ったことを職員、
子どもたち一同心より感謝して
おります。各家には先生とかき君
の写真が並んでいます。何から何
までお願いして申し訳ありません
が天国でかき君のことをよろし
くお願いいたします。かけがえの
ない子どもたちとかかけがえの
ない関係はぐくむ家、命を大切に
できる家であり続けられるよう、こ
れからもどうか見守っていてくだ
さい。ひとつでも多くうれしい報
告ができるこれからでありますよ
うこれからも歩んでまいります。



第十一回感謝の集い 感謝礼拝説教 一九九五年十一月三日

ローマの信徒への手紙十二章十五節

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」

福島 勲 前理事長

私の祖父は軍人で、若くして死にました。私自身はよく知りませんが、その軍人のおじいさんに父親の子どもの時分ずいぶん厳しく躰られたらしい。親父は病身でより厳しく育てられたらしい。その厳しさがまた私の所へ返ってきた。子どもの頃には相当小突かれました。私自身も小心でいらんことにくよくよするわけです。父親には男は人前で涙を見せたらいかん。泣いたらいかんと子どもの時から叱られて、泣きたいことがあっても人前では泣かずに陰で泣いていました。友達と喧嘩することもありましたが、喧嘩する前に泣いちゃえばこっちのもののそんなことで喧嘩が弱かったんです。それは結局かなり人間性を抑圧して心に動揺をきたさないこと、泣いたり笑ったりする事柄は人前では見せない訓練をさせられました。

その後ギリシャの哲学者達の本を読みました。その中にエビクロ

ス派というのがあり、その人達も、人間は、物事に動揺せず平静を保っていることが大切だと言っています。

考えてみればそのような一面もあり、今日のように色々な問題が沢山ありますと本当に毎日憤らなくてはなりません。それに耐えていく冷静さが必要だと思います。

江戸中期の国学者の本居宣長の本には、人間の真心はよきにつけ悪しきにつけありのままをそのまま表現することだとあります。それで自分の悲しみだとか、痛み、嬉しさという事柄を故意に隠したり抑えたりすることは本当の人間としての情ではないと言っています。これらは両方とも全く反対なことを言っているんですが、言葉の上では反対ですが、人間というのはこの二つのことがあつてしかるべきだと思います。どちらをどう取るかは好きです。どちらをよしにしる悪しきにしる人間とい

うものがあるののままの姿で人の悲しみや苦しみに共感することです。逆にながら、人が苦しんでいるのに喜んでみたり、人が喜んでいて悲しんでみたりすることはありません。そういうものは異国の人の考え方だと本居宣長は言っています。異国の人も人から学んだ彼はギリシャ哲学などは学んでいなかったと思います。おそろくそれは儒教精神に対しての反発だったと思います。

よく考えてみますと人の悲しみを自分の悲しみにする、人の喜びを自分の喜びにできるそのようなことは必要で、人の喜びを共に喜べないような人間はこれは哀れな人です。気の毒な人です。曲がっている。ひがんでいる。どこかおかしい。と考えておそろく間違いない。本当に悲しいことは悲しまなければ、泣きたい時には泣いたらいきたいと思います。これは時と場合によりますが、そういうものだ

と思います。

聖書の中に「キリストが泣いた」という言葉がただ一ヶ所ございます。これはヨハネによる福音書十一章三十五節にございます。英語の聖書を読みますとここが一番短い。「Jesus wept」と書いています。ただ二文字。一番短いんですが、ここを読んで短い文章の中で非常に深い意味を思えます。なぜ、イエスが泣いたか申しますとマリアとマルタの姉妹にラザロという兄弟がおり、このラザロが死んだんです。ラザロが死んだという知らせを聞いてイエスは「あれは死んでいるんじゃないだ。寝ているんだ」といってラザロの所に来てみますと、すでに死んでから四日経っており墓に葬られていました。そのところで泣かれたんですが、どうして泣いたのか我々のような情のあつくない人間にはわかりません。

マリア・マルタの家庭のことは聖書にはあまり詳しく書いていませんが、イエス様は時々立ち寄つたに違いない。そしてラザロもイエス様から愛されたひとりだったと思います。それが死んで泣いた。他の者も沢山死んだんですがその時泣いたとは書いてない。ラザロ

だけです。何故私がおかしいと申しますかと言いますとただ死んだんじゃない、生きてよみがえるんだ。その後よみがえりという非常に奇妙な奇跡が起こるわけです。

「ラザロよ出てきなさい」とイエス様が言われて生き返った。イエスの名によって生き返った。生き返る者の前であつて、何故イエスは涙したのか不思議で仕方がありません。私はこれを充分に解釈することはできません。他の人たちはラザロの死を前にしてみんな泣いている。みんな親しい人たちが集まって悲しんでいるところにイエスが来て、今、蘇るんだ。奇跡が起こるんだという、その前でイエスは涙した。そういう心の深い言うことのできない同情。悲しみを悲しみとした人間のありかたの表現ではないでしょうか。これ以上はわたしは説明できません。皆さんが充分に理解し解釈していただきたいと思います。ひとつは本当に悲しむ事柄に本当の涙を出すということ。つまらんことに涙を出さなくてもよろしい。誠の悲しみに対して本当の涙を出す。誠の喜びに対して喜びをもつ事柄が私たちの本当のあり方ではないか。本当に悲しむことを知る人がまた

本当の喜びを知りうるんだと思います。

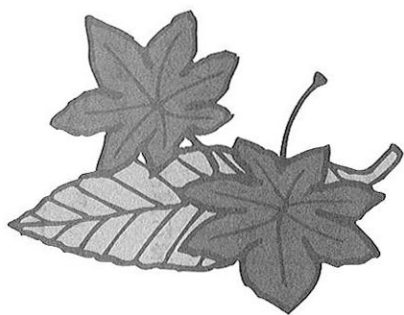
いつの時だか、日付も憶えていないし名前も忘れたんですが、それは新聞に出ていた一枚の写真なんです。これは皆さんもごらんになって記憶にある人もいらしゃると思います。場所もよくわかりません。アフリカかどこかの写真です。その写真の右側の方に裸の小さな男の子が向こうを向いて座っている。左側の方に本当に鋭い目を光らせて禿鷹が子どもを見ている。私はその写真を見て本当に「ギョッ」としました。あまり写真などを見て「ギョッ」となどしないほうなんです。本当に「ギョッ」としました。それは、おそらく子どもが今にも餓死しようとしているんです。死んだら食べてやろうという鋭い目をしてその禿鷹がにらんでるんです。こんな写真を見せられたら皆さんギョッとするだろうと思うんです。一体この撮影者は何を考えながら撮ったのか、芸術家というものは難しいからこの場面をみて色々ものを心に描きながら撮影したに違いない。おそろく餓死しなければならぬ経済的な問題や政治の貧困や色々なものがございましょう。そういう

う中で子どもが今死んでいくかもしれないんです。その死を待っている禿鷹の鋭い目。さあ、それでその写真をとった人はその後何をしたのでしょうか。

考えてみると「この子のために私は何をした」、何を今しようとしているのかと考えると全く何もできない。もし、涙を流したとしてもそれで終わってしまうんです。恥ずかしい。これではいけないんだと思います。遠く離れた所ですが、どなたの想いも一緒でしょう、何かしてあげたい。しかしそういうことに対しての世の中の人の目、涙が本当に集結するの。

私は非常に感激させられた、そうして自分の無力を悟らされたんですが、ふと先ほどの聖書の言葉を思いだし泣く者と共に泣き、喜ぶものと共に喜ぶという精神が、今蘇ってくるんだとラザロの前に涙したイエスが、その後すぐに偉大な蘇りという大きな奇跡をもつて彼に報いておいでになります。私たちには奇跡も何もありません。何もありませんが祈らざるを得ない。私のようなつまらない人間がと懺悔もしなければならぬ、悔い改めもしなければならぬ。それからなにかをお与え下さいと祈ら

なければなりません。その後には何をとお与え下さるのか、何ができるのかそれは私は知りませんが、そのイエス様の涙こそ私たちにも力をお与え下さる。私たちにもなすべきことを示してください。私たちにも考えることをさせてくださるんだらうと私は思っています。この聖書の言葉は単なるヒューマニズムの人間と人間との愛し合う、慈しみ合う、助け合うなどの簡単なものではなくてその奥に深い神の意志を憶えながら泣く者と共に泣き悲しむ者と共に悲しみ喜ぶ者と共に喜べという言葉だろうと思います。もう一度皆さんでこの言葉を考えながら、私の涙は何のために流す涙か考えていただきたいと思ひます。



かずき！ありがとう！

指導員 小西 剛史

涼しかったこの夏を振り返り、楽しい思い出ばかりが浮かびます。かずきが全力で走り抜けた人生に向き合い、共に過ごしたこの夏の日々をここに書きます。

八月一二日から三泊四日で、弟の裕と小一の藤野、小三の釣一、中三の侑子、保育士の伊藤、指導員の小西と共に秋田の小西家の別荘へ行きました。

七月の半ば、今年、夏休みに多くの行事があり、かずきには楽しみにもプレッシャーにも感じていたのです。そんなこともあり伊藤と小西とで話し合い、予定していた秋田行きを先に伝えそれを楽しみにできるように考えました。

入浴時、「かずき！今年のお盆はかずきと秋田に行こうと思ってるんだけど、どうだ？」「本当に？他に誰が行くの？秋田ってどんなところ？魚釣りできる？海にも行ける？」目をきらきらさせながら嬉しそうに聞いてきました。「かずきのしたいことは何でも、だから楽しみにな。それとな、こ

のことはまだ君にしか言っていないんだ。決まってから話すから他の子達には言っちゃダメだよ」「うん、絶対に言わない」

彼は、その後、決して口にしませんでした。食卓で、お盆期間中にどこへ行きたいかなどと他の子ども達が話をしている時、何も知らない顔でやり過ごしていました。でも、チラッと私を見て、ニコッとする彼の笑顔が今でも忘れられません。

原田家の子ども達みんなの予定が決まりお盆前の夕食時お互いに発表しました。行く先は様々でしたが、皆心待ちにしているようで、楽しい会話が弾む夕食になり、かずきも笑顔で皆と話をしていた、その時ばかりは誇らしげな顔をしていました。

出発当日の朝は午前三時半起床。午前十時ごろには秋田に着きしばらくゆっくりしてから、近の町営のプールへ。夕方には、地元の子ども達とすっかり仲良く溶け込んで楽しんでいました。

二日目はお楽しみの海です。車

で一時間ほどの海水浴場に着くとかずきは真っ先に荷物運びを手伝い、砂浜に敷物を敷いて準備を終え、早速海に入りました。沖の方には、「怖いから嫌だ」と足の届くところまでしか行きません。

僕が海の家で昼食していると、いつの間にかひよっこり現れて、何も言わずに立っています。「わかったよ、お前も食べたいんだろ」と、天ぷらを一緒に食べました。「どうだ、うまいだろ。もっと食べろ。」

三日目は、近くの渓谷でハイキングや田沢湖方面へドライブを楽しみ、夜には前庭でバーベキューです。その時もかずきはいろいろと気を遣って手伝い、食べることも火をおこしたり焼いたりすることに一生懸命のかずきでした。僕が、好物の比内鶏の焼き鳥を食べていると「オレも食べる」と言っているのが、油っこいのが嫌いな彼は一言「おえ、まずい」何でも試そうとしたが、食にはかなりのこだわりを持っていました。最終日、帰路は渋滞で十時間ほどかかってしまい、家についたのは夜の九時頃でした。かずきは相当疲れていただろうに、最後まで笑顔でいました。「かずき！また来

年も行こうな」「うん。絶対だよ」夏休み中に、誕生日があり、映画を見に連れて行ってもらったり楽しく過ごしました。

二期が始まり、元気に学校へ通い始めました。

あの日の夕方、少し早めに帰って来て、「小西さん、友達んち行くから送って、ねえ送って」

「今日は天気が良いんだから、自転車で行きな」「ええ送ってよ」

「だめ、自転車で行きな」とすると急に素直になり、笑顔で「わかった。自転車で行く」と。「宿題は？」

「うん、明日やる」駆け足で自転車に向かう彼を見て、大切なゲームボーイの修理が終わって、丁度その日に届いたのを思い出して「かずき！ちょっと待って。ゲームボーイが届いてるぞ、友達んちを持って行きたいだろ」彼は修理の終わるのを待ちこがれていて、いつもゲームボーイを入れるお気に入りの緑色の手提げを持って嬉しそうに、「うわ！やったー」「ほら、よかったな。じゃあ気をつけてな。大久保病院側からは行くなよ」「うん、わかった。じゃーね」

そして彼はもう一度振り返り、手を振って、「ばいばい」。

それが、かずきと交わした最後の

の会話になりました。

その直後事故に遭ったかずきは、それから二時四八分に息を引き取るまで、我々と最後の顔合わせをするために五時間あまり苦しむ道を選択したのです。彼は最後まで気を遣いがんばりました。か

「死は最後ではない」

東大宮教会教会学校 西貝 洋子

神様は私たちの愛する渡部かずき君の命を此度地上より取り去られました。「死は最後ではない」と知りつつも彼をなぜ今とり給うたのか？。私がそれを知り得なくとも尚あなた様を「父」とよばしめ給うことを感謝いたします。

私が渡部かずき君と出会いは一九九六年やとむつきがとれた頃だったでしょうか背丈も大きくお話しもしっかりととても可愛い男の子でした。川口市に在って、父清美さん母薫さんのもとにひとりのかけがえなき赤子として生を受け、神の導きで光の子どもの家の佐藤家でかずき君の生活が始まりました。家庭の事情で家族と暮らすことの出来ない子ども達の「子どものための子どもの施設」

は沢山の困難の中で幅広い各方面からの協力、長い間の祈りに支えられ開設されました。大勢のお兄さんお姉さんと一緒に縦割り三軒の家屋で、家族の愛に等しい養護をめざす整えられた職員方のお世話を頂くかずき君の生活はここに根を下ろしたのです。週の初めの主日は朝食をすませた光の子ども達の一人ひとり、ねむい目をこすりながら、車で主が招かれる教会へと向かうのです。幼児から高校生まで一貫し「主との出逢い」を目標としたかずき君の教会学校での生活はここにスタートし交友、健康にも恵まれ毎年精勤賞の礼拝、分級に向かう態度は実に模範生で日頃「話を聞く姿勢挨拶は相手の目をよく見て・・・」との約束を

守りこちらが気づかずにいる時は「とんとん」と体をたたき相手の目を見て挨拶するのです。小学校高学年になってからは年少児への伝承、いたずらっ子に対しての促し、たしなめるなどリーダーシップ抜群。成長させて下さる神の力を実感するときでした。また、礼拝堂に花をかざる者の後に寄り「ぼく、このお花大好き」とひと言他者への思いやり、洞察力も兼ね育ちました。分級時にはその日の御言葉を書き込みますが冴えた声は今でも耳に残ります。こんなに元気なかずき君も一度礼拝中に椅子にかけていられない程苦しみ次週には案の定教会学校はお休み。二週間後に出逢ったかずき君に声がけすると「大丈夫です！」そんな時でも年少児への配慮は教会員の目にも映っていました。あんなことこんなことを思い出しますとかずき君との生活は今も継続し共に生きているのです。

かずき君の住む天国はパラダイスかしら？この世では日々報道される犯罪、慌ただしい毎日。少年犯罪に対してはこれまでより一段と厳しい姿勢で、加害者としてのみの処遇をすることに解決法を見

出そうとするこの発想に些か疑問を感じながら。目を転じ大空を見上げると、満月の下方に赤く輝く六万年に一度の火星の大接近。これらの背後に大いなるお方の意志を感じます。「自己受容」し神に委ね天にあげられたかずき君、今日までの八年間で一緒に過ごした恵、主の愛に、只感謝の祈りを捧げるのみです。

「私の目にあなたは値高く貴い」
(イザヤ書43・4)

この世に残された裕君、お母様の悲しみの上に主による慰めと癒しを切に願ひ祈ります。かずき君の前夜式で淡々としていた裕君が突如真っ赤になって泣きじゃくった胸の中、急激に成長され驚くほどのスピードで走り逝ったかずき君の姿、併せたこの思い出は私共一同永遠に心にとめ続けることでしよう。(かずきくん柩に入れた天国へのおみやげ忘れないでね。)



あかり窓

心理室から

冷夏、暖秋(そんな言葉があるでしょうか?)という異常な天候が続きましたが、皆様お変わりなくいらっしゃいますでしょうか。

この夏の終わりにかきくは自分の人生をまっとうしました。心理という立場で私は彼に関わり続けてきましたが、彼が私に見せた内面というのは、とても鮮やかで豊かで、その分とても繊細で傷つきやすく、複雑な光を放つガラス細工のようでした。そして彼自身がその美しいガラス細工を扱いきれず、大変な苦勞もしていました。自分を持って余し、自分自身を傷つけるような行動に出たこともあります。そのようなかきくんの心に寄り添い、彼が自分自身を受け入れられるまで側で待ち続けることが私が彼に関わる意味でした。自分のいいところも悪いところも、素敵な過去も目を覆いたくなるような過去も、すべて含めて自分として精一杯生きていこうと本人が決心できれば、私がある意味があると思っていきました。しかしかきくんが亡くなった今、私は彼にとつてどういう意味になれるだろうと考えさせられています。答えはそう簡単に見つかりそうにないですけど、かきく

くんは自分を否定したい気持ちに駆られながらも、それでも必死に自分の人生を生きたという事は確かだと思えます。彼の魂はよく生きた、それを心に留めていきたいと思えます。 積 みどり

子どもたちの季節 仙道家

学校が休みのため子どもたちがフルタイム家にいる夏休み。その期間、特にしっかりと取り組もう、と色々活動プログラムをします。その中でお盆期間に家に帰ることのできない子どもたちのためのプログラムは特に心を遣います。

仙道家では、スタッフである竹花の姉夫婦の御好意で、別荘を使わせて頂くことになりました。塩田姉妹、下町兄妹、静一、真里、和哉、弥沙の八名とスタッフ四名がお世話になりました。

静岡県伊東市にある別荘で子どもたちは、各々海を楽しみました。

(海に入っていたのは、静一と塩田姉妹ぐらいでしたが...)いつもとは違う環境で腕白ぶりがパワーアップした3泊4日でした。多くの方々に助けていただいていた子どもたちが生き生きと楽しく過ごせる夏休みになりました。

それぞれに楽しい思い出を心に、二学期を迎えた私たちに悲しいできごとが訪れました。渡部かきくが神さまのもとに召されたのです。あまりにも突然のこと信じられませんでした。そしてじきに悲しさと虚しさややるせなさやがじわじわと襲ってきました。

平常に戻った今も、ふいに思い出し胸の奥が痛みます。

かきくは去年のクリスマス・ページェントで私が担当している真里と宿屋の主人とおかみの役と一緒にやりました。真里がうまくできずにいじけてしまった時もかきくは誰よりもやさしく、そして忍耐強く真里を待ち、促してくれました。そんなかきくの存在に真里はたくさん助けられました。

かきくのことを話すとまだ悲しい思い出になりますが、かきくの残してくれた思い出を語るとあたにかい気持ちに包まれる時がきつとくるでしょう。 池田 祐子

原田家日記

私がこの光の子どもの家に来てから、もうすぐ七ヶ月が過ぎます。原田家に来てからは菅原園長がよく言われる「出逢い」というものを考えます。

私とかきく君は、たった半年ほどの時間しか共に過ごすことができませんでした。

でも、この出逢いは私にとつてかけがえないものとなりました。彼は私にいろいろなことを教えてくれたように思います。彼の死を通して私は、「生きているだけで良い。存在するだけでいい」という言葉の意味を改めて実感しました。

子どもは、いろいろなことをします。時にこちらがイライラしたり、逃げ出したくなるようなことも。しかしながら、どんなことがあったにしても、その子がそこに存在するだけで意味があることなのです。そのことを彼に教えられたように私は想っています。

私はまだまだ未熟であり、この原田家で何をしたら良いのかわからない日々ですが、かきく君と共に子ども達一人一人と真剣に向き合っていきたいと思っています。

伊藤 麻美子

季節のおとずれ 市川家

秋もめっきり深まって参りましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

二学期が始まりあつという間に二ヶ月が経ち、真っ黒に日焼けしていた子ども達も

少しずつ白くなってきました。

夏休みの終り、八月二十八日から美季、静一、要、美也子の四人が仙道家からグループホームに移り、悠子と共に新しい生活を始めました。静一は新しい小学校に転校し、すっかり慣れ、楽しんでるようです。皆新しい生活を楽しんでいます。

新しい生活が始まり一週間経った時、かきくの事故の知らせがありました。命に別状はないという事だったので安心していただけ、その夜危篤、亡くなったという事を聞き、かきくが天国に召された事が信じられませんでした。

この夏、小学五、六年生で赤岳登山に挑戦しました。私も一緒に登り、山頂小屋に泊まり、下山の時も鎖場やはしごの難しい道に挑戦しました。悪天候で霧が深い中、かきくは「みき」「市川さん大丈夫」「福子ちゃんがんばれ」と後から下りてくるメンバーを気遣い、声をかけあつて下りてきたことを思い出します。難しい鎖場を全員が下りきった時、記念写真をとりました。しかし、とうとうかきくにその写真を見せる事ができませんでした。

瑞希はかきくと同じ小学五年生です。静かに眠るかきくと対面し、家に帰って来た美季は、声をあげて泣いていました。赤ちゃんの頃から一緒にいたかきくの死はとても辛いことです。これからは同い年の美季には特に、かきくの分まで一日一日を大切に過ごして欲しいと思います。そして、子

ども達、私達も生きている事が当たり前ではなく、無常を意識し、今自分たちが生きている事を感謝していきたいと思えます。

私が光の子どもの家に来て、かきくといえ、沢山の優しさをもらい、楽しい思い出ができました。とても心優しかったかきく、ありがとう。 市川美穂

光の中で

佐藤家

子ども時代の夏休みの思い出は一生忘れることのできない宝物だと思います。私自身の子どもの時代の夏休みは様々な思い出があります。卒業した子どもたちが帰ってくるたびに一緒にいった海や山の出来事を語りあいます。今年の小学校五・六年生の五人にとつても忘れることのできない登山になりました。今年も八ヶ岳の赤岳を目標で登山する計画を立てました。上りは鎖場やはしごをつたいながらやつとの思いで霧の中の標高二八九メートルの山頂にひとりの脱落者もなく辿りつきました。山頂小屋で昼食。そして下山の予定が尾根を行ったり来たりしている間に時間は午後四時を過ぎていました。標高三千メートル近い場所でも風も強くなり気温も下がり急遽山小屋へ泊まることにしました。職員達は冷や汗ものですが、子ども達は初の山小屋体験に大喜び。夜は山小屋オーナーのおもしろい山の話を聞き、外に出て山頂から見ると町の灯はとてもきれいでみんな感動していました。

た。みんな下山する中かきくは昨日痛めた足の私を気遣い励ましながら一緒に歩いてきてくれました。三時間近くかきくとも一緒に歌ったり色々な話をしながら歩いた時間は今から考えるととても不思議な時間でした。そしてかきくの優しさに助けられました。数年後彼らが大人になった時かきくの思い出と共に今年の赤岳登山のハプニングを語り合えることを楽しみにしています。

穴水 祐介

河のほとり

倉澤家

グループホーム担当の私は、普段かきくと顔を合わせることはあまりありませんでした。ただ毎週日曜日、東大宮教会での教会学校の時には顔を合わせ言葉をかわしていました。かきくは小さな子どもたちが好きで、よく相手をしてくれていました。私の娘にも会うたびに「みきい。」と笑顔で声をかけてくれていましたが、人見知りの激しい娘は声をかけられても私の後にかくれてしまい、かきくをがっかりさせていました。そんな時かきくは「オレ、みきに嫌われているみたいだよ。だっていつもかくれちゃうんだもん。」と言っていました。

「違うんだよ、嫌いなんじゃないって恥ずかしいだけなの、ごめんね。」と謝る私に笑顔で応えてくれていたかきくです。

八月の誕生会は、ボランティアの学生の皆さんも加わり、園庭でにぎやかに行列

しました。8月生まれのかきくは誕生者として、皆から祝福されました。学生の皆さんからは誕生者に手作りのオモチャがプレゼント。そのオモチャを見て欲しくてたまらなくなった娘は、自分も欲しい!今欲しい!とじんだんだをふんで泣き叫びました。しかし誕生者ではない娘の分があるはずはありません。なだめても、すかしても欲求のおさまらない娘を前に私が困り果てていると、かきくがやつて来て「これがほしいの?あげようか?みきにあげるよ。」とオモチャを差し出してくれたのです。私は何回も「ありがとう。」をくり返し、お礼を言いました。

倉澤 智子



子どもたちの今・これから その2 児童虐待防止法・児童福祉法改正

菅原 哲男

仕事や住居も決まっているというが、いつまで待っても動きそうにもない様子に、交通費の有無を確認すると無いという。少しの食事代も含めて渡すと父は帰っていった。

それから数ヶ月が経った夏の初めの夕刻、また父親がやってきた。今度は、息子と会いたいから息子を光の子どもの家から呼び出してくれと、近所の家を訪ねて訴えた。その家の主婦は子育ての相談を受けたり親しくしていたので通報して下さり、職員が父親と会い、事情を聞くと「息子に会わせろ」と怒鳴り散らし、喚き叫んだのである。

丁度そこに帰った私が対応すると、先回自分が行き場を失い、食うにも困り、厳寒の深夜に助けを求めた時にした私たちの対応などはさりと忘れ喚き続けるのだった。

その時の私たちの徹に父への対応は、何よりも居場所を確定し、今後の生活への足場を確保するというものだった。徹の父の落ち着き場所などについて福祉事務所と協議し、本人も同意して比較的規制の緩やかな保護施設への入所がきまり、明日ケ

ースワーカーとそこへ行くことになっていた。

その夜仕事を終えて帰る前に、子ども家庭センターにいる徹の父の部屋を訪ねて、「いよいよ明日だな。そこで最初からやり直して生活を整え、せいせいと徹に面会にこれるように頑張つてね。もう子ども不幸は終わりにしてね。」と励ました時の「子ども不幸」という言葉が氣にくわなかったと言ひ、「息子を警察と学校と児童相談所と菅原がグルになって自分から取り上げた、人さらいめ！」と怒鳴り続けた。その状態ではとても子どもに会わせるわけにはいかない、と強く拒絶して取り合わないでいた。

それから父親は夜の十時頃にまた来た。ひどく酒に酔っていた。私が氣に入らないらしかったので、主任などの職員らが対応したが収まらないう。すぐ隣が病院でもあり、入院している方々もあり、怒鳴りまくる父親には閉口した。児童相談所とも協議したが適切な対応策などもなく、私が宿直して対応することで職員を帰した。深夜2時頃、扉も何もない構内に入り、徹の居室の下に侵入し、

「徹！出てこい、一緒に行こう、児童相談所や施設に騙されるな！菅原に騙されるんじゃないぞ！」と、叫び続ける罵声に、致し方なく最寄りの警察に保護を依頼した。

翌朝、警察から連絡を受け、徹の父の身柄を受けた福祉事務所のケースワーカーは、父親にどうするか、と聞いたら、駅で降ろしてくれと言うのでそうしたと、報告してきた。それ以後徹の父は姿を現さなくなった。

こうして、地域の剣道クラブや高校生活を楽しみながら励んできた徹は、一学年ひと桁の高順位の成績で終わり、二年目に入っていた。

そんな梅雨の頃、徹の担当福祉司がきて、徹の父親が、光の子どもの家が見える利根川の土手で焼身自殺を図った。大事には至らず、その県の県立病院に収容され、精神科の診療を受けて回復し、退院後生活保護を受給しアパートで生活している。

父の回復のために父親は子どもに固執しているの、父親の精神的回復のために子どもと面会させられないかと問い合わせてきたので、どうだろうかという。

父親の回復のためにはそれはいいだろう。しかし、その時その担当福祉司は父親にはまだ会っていないと

いう。

医師や父親、あるいはアパートを借りる時の保証人になった若い女性の身元などを調査し、アセスメントをしっかりと方針を出し、徹の利益になるようだったら面会もいいだろう、と私の意見を申し上げた。徹にとつてはそろそろ進路を決める大事な時でもあった。

父親はその後、数回電話をしてきて、徹の声を聞かせろ、遠くでいいから姿や顔を見させてくれと迫ったが、その前にこれまでの光の子どもの家との対応について整理して信頼関係を回復しなければならぬだろう。その上で、今後を見通して子どもの利益になれるよう協議することが先決であることを伝えてきていた。

焼身自殺を具体的に実行するような精神状況の父親である。何をするか分からない不気味な不安や今後の子どもとの関係を考へて、児童相談所に調査や調整を依頼したが半年を過ぎても忙しい児童福祉司はまったくこの親や関係者に関わっていないかった。

徹が電車通学していることから、朝晩の徹の通学の時に父が現れる可能性はかなり高いと私たちは考えて対応しはじめていた。(以下次号)

現場から

続・光の子らしく

かずき君を偲んで

⑨

岩崎 まり子

秋もすっかり深まってきました。皆様、お元気ですか。

さて、光の子どもの家の三軒の家の前には、それぞれ赤や白の花水木が植えられています。皆さんもご存知のようにこの木は、季節ごとに違う表情を見せてくれます。花が終わり、葉が出てきて、その葉が色づき始めます。やがて、その実は色づいた葉よりも、彼岸花よりも赤く染まっています、ひよどり達のいい餌になるのですが、鳥達より気の早いうちのピーチクパーチク坊やや、ピーチクパーチクお嬢様たちが、その手

の届く範囲は一つ残らず採って、ビニール袋や空のペットボトルの中に大事にしまっています。

丘実ちゃんのロッカーの中からビニール袋に入れた栗やどんぐり、蕨の実など大小入り混じった「宝物」が出てきます。見れば思い出すのでしようが、しまい込んだことさえ忘れていたことは少なくありません。

忘れるという力はとても偉大です。その力が備わっていないと、ここに来なければならなかった子どもたちは、どんなにか悲惨な歩みをしなければならなかったことでしょう。

火傷や骨折の跡は全く珍しい話ではなくなってきたのです。今はアメリカで頑張っている萌季さんもかなりの暴力に曝されていたのですが、「全然記憶にない」と言っていました。ただ、「記憶にない」ということが、全く何の影響も受けていないという意味ではないということは明らかでしょう。体にしみ込んでいるとしか言いようのないくらい影響を受けていることもあります。ですが、意識していかなくても記憶に蓋をし、心の奥深く、忘れるくらい奥深くにしまふことは可能なのです。

虐待という極端な記憶でなくても誰しも自分の心の引き出しの奥深くに大事に、または、どうしようもなくしてしまい込んである事柄があるかと思ひます。私にもいくつかありますが、その一つは亡くなったかずき

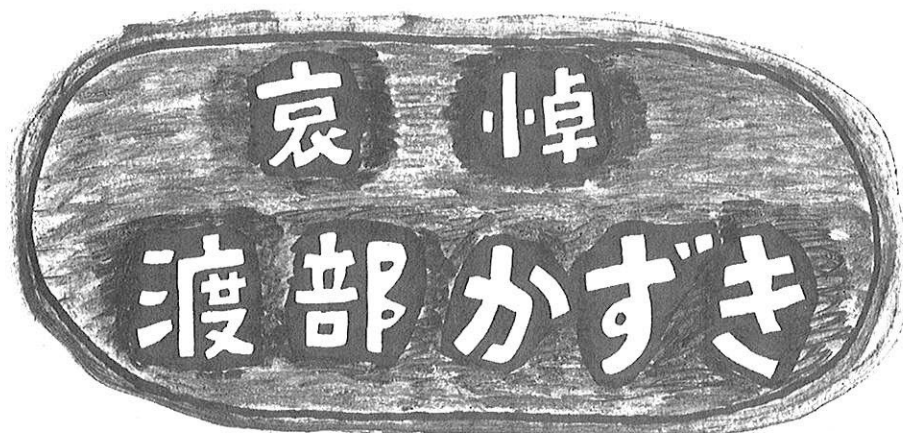
君のことがあります。私は、彼の幼い頃を知っていました。その頃のことで彼に対して大変申し訳ない思いを抱き続け、私の自己満足のためではなく、彼にそれが必要な時に謝罪をしたと願っていました。けれど、それを要請されることなく、彼は逝ってしまいました。私の手元に残されたものは、この夏、小学生の高学年のグループで赤岳に登った際、私が石好きだというのを覚えていてくれた彼が山頂で拾ってきた石です。

掌に残されたその石も、その時の彼の笑顔も、しっかりと握っていつでも機会ある毎に眺めて、思い出して、懐かしい思いに浸れるでしょう。けれど、掌から零れてうずたかく、ただ積み重ねられているだけの砂のような記憶と共に私は生きていくように思ひます。

懐かしかったり、つい微笑んでしまったり、胸が痛んだり、どんな記憶でさえも、たぶん長い年月のうちに「宝物」になっていくのでしょうか。夏にお世話になった皆様、子ども達はそれぞれ「宝物」を持ち帰りました。心から感謝します。かずき君もたくさん「宝物」を持って逝ったと信じます。

ご冥福をお祈りします。





日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

4月1日▶6月末日

4月

幼児10名 小学生9名 中学生6名 高校生8名 計33名
 1日 久保姉妹入所 山口指導員担当
 埼玉県地域小規模施設開設運営開始
 ○ 大利根中学 原道小学校など学校長転任のご挨拶
 4日 入進学祝いを35名の子どもたちと
 7日 川越児童相談所前園福祉司来訪してヒロミと面接
 8日 公立学校入学式
 10日 大利根藤幼稚園入園式
 16日 越谷児童相談所藤井副所長他1名転任ご挨拶に来訪
 18日 虐待を否認している父母のさいたま地裁公判
 20日 復活祭愛餐会東大宮教会で
 24日 畑鈞一入所 原田家北谷グループへ
 ○ 土屋小児科奥山Dr成黎の追跡調査に来訪
 28日 光の子どもの家大利根町後援会役員会
 30日 川越児童相談所よりヒロミの母の計報
 5月
 1日 ヒロミ母火葬 山下下恭二牧師により2日葬儀
 5日 第18回子どもまつり実施たくさんのお友達来訪
 7日 ご支援者梅沢三保氏加須市中田病院入院加療の報
 13日 小学2年生のショートスティ16日まで
 14日 赤十字奉仕団・大利根町後援会の構内整備ご奉仕
 15日 田村さん散髪ご奉仕 感謝
 24日 第69回理事会報告・決算など審議して承認
 25日 菅原哲男著書の出版記念祝賀会大宮に130名参集

26日 第10回バザー打ち合わせ
 28日 大利根町後援会総会
 6月
 1日 しずくの会草取りご奉仕会長ご病気で湿りがち
 5日 さいたま市児童福祉課主幹他来訪 さいたま市に建てる60人規模の児童養護施設について意見交換
 7日 第10回バザー実施後援会しずくの会青山学院大学聖学院大学など大勢のご協力とたくさんの地域の人々が参集して盛会 収益約50万円
 10日 埼玉県指導監査実施
 12日 田村さん散髪ご奉仕 感謝
 14日 大利根藤幼稚園大運動会 ご家族も来訪し大活躍！
 15日 小学2年生ショートスティ20日まで
 24日 江森ヘアサロンの引き続いての調髪ご奉仕 感謝
 26日 埼玉県児童養護施設『あゆみ学園』来訪し交歓
 この期間の物品ご寄贈者松本明子 若柳兆慶 須藤保
 渋井みさ子 若林由子 能勢幸一 高橋医院 鈴木重義
 吉本和子 市川輝彦 大塚勇四郎 江森百合子 小早川典子
 柿崎和郎 大熊和子 遠藤千代子 吉松みどり 堀切京子
 伊藤みち子 鈴木麻友 橋本春江 タカラブネ 伊藤まりこ
 荒井勝巳 神田幸枝 浅海徳子 杉山登志美 嶺澄子
 松岡享子 石川順江 栗原和子 山口栄子 岩崎悦子
 穴水まり オオタニ 小谷野亨
 の各位様他大勢様 感謝 (くら)

////// ———— 反 射 光 ———— =====

冷夏でしたが子どもたちの夏は暑く美しくそして挑戦の時でした☆更にご支援者が増えられ内容豊かな夏を感謝☆光の子どもの家はこの季節は特別な色彩を加え続けています☆昨年は福島県前理事長を天にお送りし今年また渡部かずきを強い無念を残して逝かせました☆虐待などで親権者が不同意の入所が後を絶ちません☆その子ども達の事故に誰が責任を負うのか背筋が凍ります☆人が生きることの無力さは人を超えるものの力を感じ得させます☆古今の哲人たちにも生死は不可解なものだったようです☆フッサールは誕生と死は経験知とするに能わずと言います☆ハイデッカーは生に先駆する死と規定したことがそれが何を意味するのかは言えない☆生と死は個人的なものではない☆奪うものの存在なしに考えられない☆福島先生が諫め諭し示された在り様を深め、かずきが衝撃と共に残したベクトルを考え生かし光の子どもの家の歴史と伝統にしていく決意です。☆乞う更なるご支援！ (哲)